

広島県福山市新市町常
しんいち つね

てんじ
天地遺跡（第2次）見学会資料



平成 27 (2015) 年 11 月 28 日 (土)

公益財団法人広島県教育事業団
福山市教育委員会

1 はじめに

公益財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室では、一般県道金丸府中線道路改良事業に伴う天地遺跡の発掘調査を昨年度の第1次調査に引き続き、第2次調査を平成27年8月31日から平成28年1月22日までの予定で行っています。このたび遺跡の概要が明らかとなつたことから、見学会を開催します。

2 位置と環境

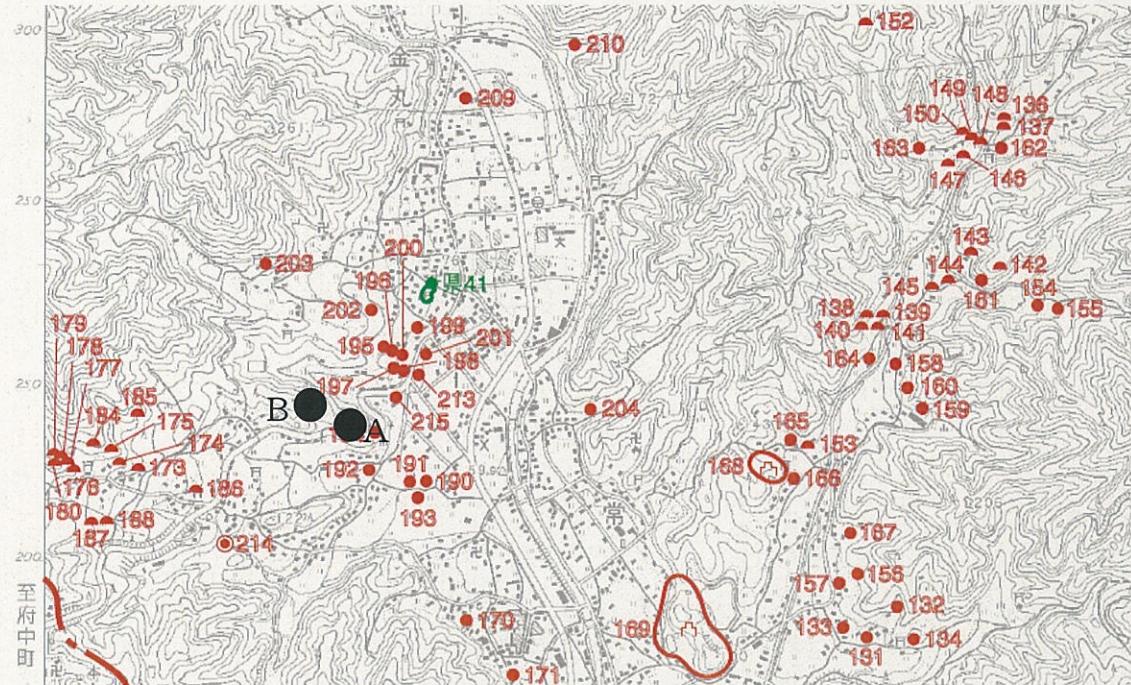
新市町は福山市の北西部に位置し、西は府中市、北は神石高原町に接しています。神石高原町から流れる神谷川が町域の中央を南流し、芦田川と合流します。本遺跡は新市町北部の常金丸地区にあり、今年度調査区の標高は105～115mです。

周辺の主な遺跡としては、次のとおりです。宮脇遺跡は縄文時代早期の土器や細石器が出土した遺跡として知られています。権現古墳群は13基の古墳からなり、埋葬施設は横穴式石室です。権現第1号古墳は直径11m、高5mで、権現古墳群のなかで最大規模の円墳であり、6世紀後半の古墳の姿をよくとどめています。尾市第1号古墳は直径10.7mの八角形墳で、7世紀後半の築造と考えられています。羨道を含めた埋葬施設の平面形が十字形になる国内唯一の古墳として知られています。矢立遺跡では奈良時代から平安時代の鍛冶炉が直線上に7か所並んだ状態で検出されています。本遺跡（第1次調査）と近い時期であり、関連が想定されます。

3 昨年度の発掘調査

昨年度は本年度調査区の西側斜面の下方を調査し、竪穴住居跡2軒・溝状遺構7条・段状遺構18基、柱穴群を検出しました。出土遺物は弥生土器・須恵器・土師器・土師質土器・瓦質土器・陶磁器・鉄製品・石製品があり、古代・中世の土器が中心を占めています。このように昨年度調査区では古代・中世の集落が確認されました。また、石帶の一部（丸鞆）や円面鏡の一部などの出土から古代官衙との関係が想定されます。

なお、昨年度は天地遺跡の西側の尾根上で天地第1・2号古墳の発掘調査も行いました。いずれの古墳も方形に近い墳丘で、埋葬施設は第1号墳が箱式石棺、第2号墳が二段掘りの土坑です。出土遺物は僅少で、古墳の時期は明確ではありません。



周辺遺跡分布図 (1:20,000)

(ホームページ「広島県教育委員会 広島県遺跡地図」に加筆)

<u>A 天地遺跡</u>	171	茶屋遺跡	205	厚山遺跡
<u>B 天地第1・2号古墳</u>	173～185	権現第1～13号古墳	206	田能城跡
<u>県41 宮脇石器時代遺跡</u>	186	垣手古墳	207	天神山城跡
131～134 尼神窪1～3号遺跡	187・188	向田第1・2号古墳	208	厚山古墳
136～141 芦浦第1～6号古墳	189	常城跡	209	金丸1号遺跡
<u>142～145 尾市第1・3～5号古墳</u>	190	天神面遺跡	210	向金丸遺跡
146～150 神出第1～5号古墳	191	曾根田遺跡	211	石屋原城跡
151・152 塚久保第1・2号古墳	192	平佐遺跡	212	亀寿山北遺跡
153 屋敷荒神古墳	193	正尺遺跡	213	大地2号遺跡
154・155 岡奥1・2号遺跡	195・196	内黒1・2号遺跡	214	金名の郷頭
<u>156～164 芦浦1～9号遺跡</u>	197・198	浜1・2号遺跡	215	矢立遺跡
165 屋敷荒神西遺跡	199・200	土生田1・2号遺跡	216	輪藏遺跡
166 宇根東遺跡	201	大地遺跡		
167 打部遺跡	202	矢倉田遺跡		
168 宇根城跡	203	常遺跡		
169 日隅城跡	204	砂原遺跡		
170 仁吾遺跡				

4 本年度の発掘調査

本年度は昨年度調査区の東側の尾根を調査しました。調査区は尾根頂部の一部（南側）及び西側斜面で、尾根頂部で多くの遺構を確認しました。これまでのところ、尾根頂部で竪穴住居跡2軒、^{どころ}土坑50基近く、溝状遺構1条、礫群5か所などを検出しました。主に弥生時代の遺構と古代～中世の遺構があります。

弥生時代の遺構は、竪穴住居跡2軒、貯蔵穴と思われる土坑（以下、「貯蔵穴」という）8基などがあります。竪穴住居跡のうち、南側に位置するSX13は平面形が隅丸方形で、2本柱の建物です。床面の周囲に壁溝が巡り、床面の中央に炉があり、その両側に柱穴があります。一方、北西側に位置するSX53は平面形が円形状で、4本の柱をもつ建物です。床面の周囲に壁溝が巡っています。貯蔵穴は北東側から南東側にかけて散在しており、南東側に5基が集まっています。平面形はいずれも円形状で、壁が垂直に降りるものや底面が広がって断面フラスコ状になるものがあります。そのほか、南西側の平坦面の縁辺部に位置する土坑SX20でやや多くの弥生土器片とともに板状鉄斧が出土しました。

古代～中世の遺構は、墓と思われる土坑（以下、「土坑墓」という）36基からなる集団墓、礫群5か所などがあります。土坑墓は尾根頂部全域に広がっていますが、やや北東寄りに偏っています。その分状況からみて、いくつかのグループに分かれそうです。土坑墓はいずれも素掘りで、木棺の痕跡は確認されていません。3基の土坑墓の内部で人骨が残っていました（SX25・29で人骨頭部など、SX46で人骨とみられる骨片が出土）。平面形が長方形形状のものや長円形状のものがあります。土坑墓の内部や上部に礫を伴うもの（14基）と礫を全く伴わないもの（22基）があり、その重なり合いから、礫を伴わないものが古く、礫を伴うものが新しい傾向がうかがえます。遺物はSX15・18で陶器片が、SX22・23・26で鉄釘が、SX31で湾曲した棒状の用途不明の鉄器が出土しました。礫群SX1～5は尾根頂部の東側の土坑墓の周囲で確認しました。拳大から人頭大の礫が幅1～4mの範囲に散在していました。遺物はSX1・2・5の周辺で骨片が、SX3で鉄剣が出土しています。礫群は土坑墓と同じレベルか土坑墓より上層にあることから、土坑墓と近い時期か土坑墓より新しい時期と考えられます。

調査区内で出土した遺物は、弥生土器（壺・甕・鉢・高杯）・須恵器（^{たかつき}杯）・土師器（皿・^{つき}杯）・土師質土器（こね鉢？）・陶器（甕）・鉄製品（鉄剣・鉄斧・釘・用途不明の鉄器）・五輪石などがあり、弥生土器が中心を占めています。

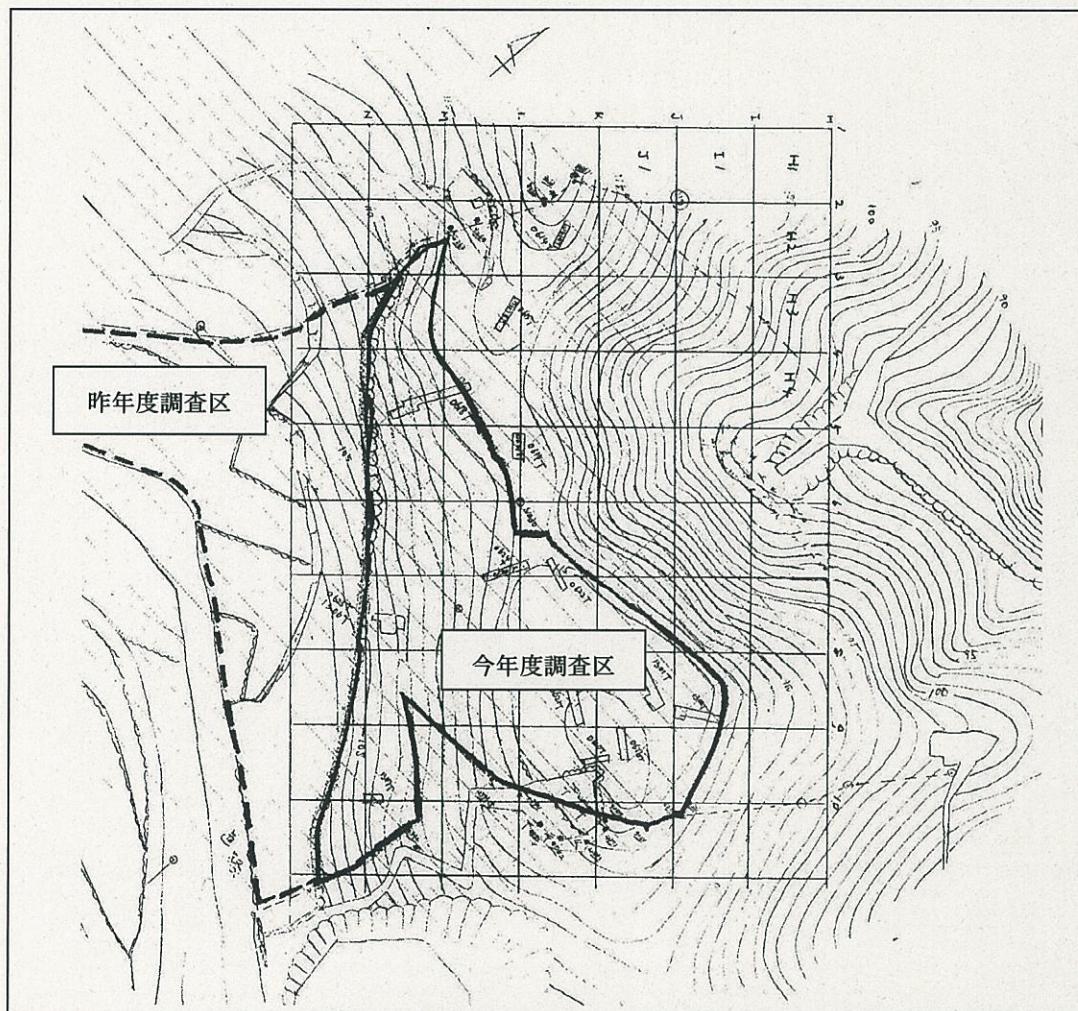
5 おわりに

本年度の調査区では弥生時代後期の集落跡、古代～中世の集団墓などを確認しました。

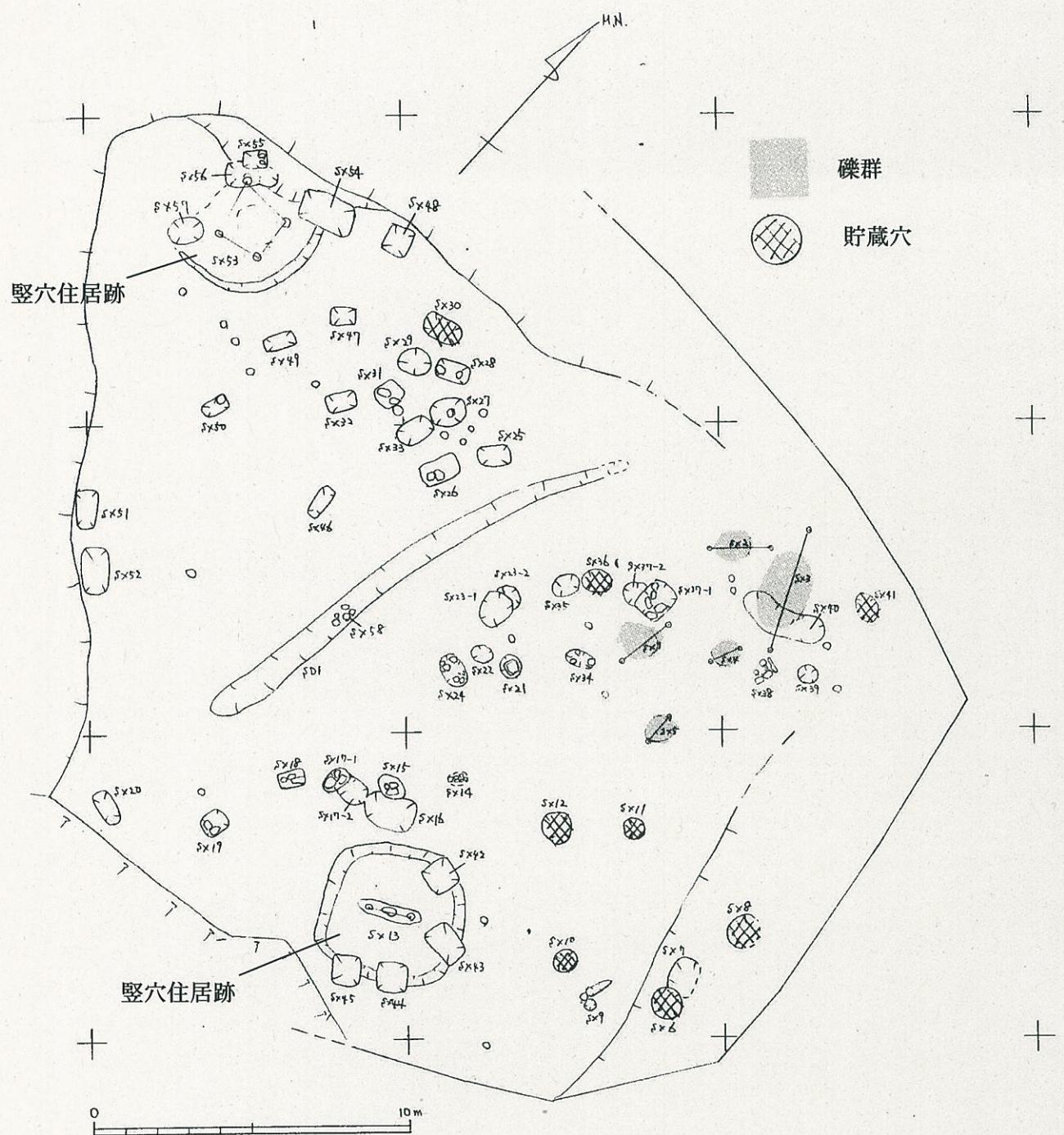
弥生時代後期の集落跡の遺構は竪穴住居跡・貯蔵穴などがあります。2軒の竪穴住居跡は約20m離れていますが、いずれも尾根の中央部付近に位置しています。貯蔵穴は尾根の北東側から南東側にかけて散在し、竪穴住居跡と重なり合っていません。鉄斧が出土した

土坑S X 20は単独で南西側に位置します。このように竪穴住居跡・貯蔵穴などは集落内で異なる場所に配置されているようです。なお、今回検出した竪穴住居跡は2軒で少数ですが、当時の集落は南東方向の尾根先端部の緩斜面に向けて広がっていたものと思われます。

古代～中世の集団墓は尾根頂部全域に広がっていますが、数グループに分かれそうです。その背景には近辺の尾根の麓に在住するいくつかの集団によって営まれたことも考えられます。土坑墓の内部や上部に礫を伴うものと礫を全く伴わないものがあり、後者が古く、前者が新しいようです。また、土坑墓と礫群に時期差がある可能性があります。集団墓や礫群の造営時期は明確ではありませんが、土坑墓埋土から出土した陶器片や調査区内の表土から出土した土師器（杯）・須恵器（杯）・陶器片（常滑焼・亀山焼？など）・五輪石など古代～中世の遺物から、この時期に営まれたものと思われます。



調査区位置図（約1：1000）



遺構配置略図（約1：200）



弥生時代の竪穴住居跡 (S X13, 北西から)



弥生時代の竪穴住居跡 (S X53, 西から)



弥生時代の貯蔵穴 (S X10, 北西から)



弥生土器が出土した貯蔵穴
(S X11, 南東から)



弥生土器 (左) と鉄斧 (右) が出土した土坑 (S X20, 南から)





土坑墓集合写真 (S X 25~33・46, 東から)



人骨が出土した土坑墓 (S X 25, 北西から)



礫を伴う土坑墓 (S X 37, 北から)



土坑の上部にある石組み (S X 38, 東から)



骨片が出土した礫群 (S X 2, 北から)



鉄剣が出土した礫群 (S X 3, 南から)